http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.271　13/10/21

生きていていいんだ

前号で紹介した『ホテル・ニューハンプシャー』について、BOOK.asahi.comの2012年11月18日版に、タレントの石井正則さんが「思い出す本、忘れない本」としてとりあげている。イイ文章なので紹介しよう。

＊

１０代は普通の文学少年のように太宰や三島を読んでいました。『ホテル・ニューハンプシャー』を読むまでは、一番好きなのは太宰治『斜陽』だったんです。でもその１位の座が脅かされるな、と思ったぐらい引き込まれました。いまはどっちが１位っていえないです。二つの作品の共通点は、物語の世界にちゃんと読者を連れて行ってくれる“求心力”がものすごいところです。

この本を手に取ったのは３０歳過ぎだったと思います。村上春樹さんがアーヴィングについて何かに書いていたのを読んだのがきっかけで、最初は『ガープの世界』を読み、それが面白くて、すぐほかの本も何冊か買いました。

中でもこの本は本当に面白いと思いました。不思議な小説ですよね。ベリー家というある家族の物語で、悲しいことばかり起こるんですけど、読んでいても暗くならない。

とにかく物語の力が圧倒的です。川は、上流は流れが細くて速いけど、下流になると太くゆったりしてくる、でも下流は中に入ったらもっていかれる力はものすごく強い、その下流のエネルギーに近いものを感じます。読み進めるうちに、話がどんどん太くなっていき、最終的には広い海まで流れ着くような、とても大きなものに包まれている感覚になる。読んだ後、「生きてていいんだ」って爽快感さえ感じさせてくれる。実に小説的な小説で、本を読むことでしか味わえないだいご味を感じさせてくれます。

これまでに３回読みました。そんなこと、あんまりないです。１回目に読んだ時は、人から内容を説明してといわれても「あのね、面白かったの、すごく」としかいえなかった。面白すぎる小説ってそういうことありませんか？　それでどんな話だったっけと読み返したのが２回目。３回目は１年ほど前。自分で好きなところに線を引きながら読みました。いま見返しても、線を引いたところはいいセリフばっかりだなあ。

本は好きでいまもよく読みます。喫茶店が好きなので喫茶店で読んだり、寝る前に読んだり。以前、仕事で肉体的にも精神的にも疲れきって、帰って一眠りしようと思っていたとき、一緒にいた妻に「おれ、神保町に行った方がいい気がする」と突発的につぶやいて、ひとりで出かけ、古本屋をぶらぶらして本を買って、喫茶店に入って読みました。それで癒やされて帰ってきた。あー、紙に触れてないと落ち着かないんだなあと。本ってやっぱりいいな、と思った瞬間です。

＊

石井さんも３回読んだと書いている。私も３回読んで、英語版のペーパーバックも買って挑戦した（５ページくらいで敗北…笑）
でも、それくらいしてみようと思った小説である。第一章は今でも好きだが、読むたびごとに新しい魅力を発見する。文学のもつ尽きない魅力の源泉である。